

この本をお勧めします



若手の技術者と研究者へ

自分の体で実験したい 命がけの科学者列伝

レスリー・デンディ、
メル・ボーリング共著
梶山あゆみ訳

紀伊國屋書店 2007年発行
222ページ 1,995円
ISBN: 978-4-314-01021-4



あなたは、“物事がどうなっているのか? ”、“どうにかこれを実現したい!” と思ったことはないだろうか。さらに“何が何でも!!” と強い欲求をもったことはないだろうか。この欲求に囚われ、ついに自分の体を使ってまで実験した人が太古から現在に至るまで数え切れないほど多くいた。その理由は、ただ単に空腹のためだったかもしれないし、無知のためだったかもしれない。その中には無謀といわれる者もいたであろう。

本書では、自分の体を使った偉業によって歴史に名前を残した研究者たちを10のエピソードとして紹介している。疫病の原因の仮説を立証するため自ら人体実験をして不幸にも命を落としてしまった医学研究者、また、その意志を引き継いだ研究仲間の話、あまりにも先進的な研

究だったために学会からは弾かれ、社会的にもトラブルを抱えてしまう研究者の話、ノーベル賞で有名なマダム・キュリーの放射線科学の研究の話など、様々な実験を行った研究者の話が書かれている。これらの話に登場する研究者に共通するのは、使命感と飽くなき探究心である。

1話1話は、さほどの時間を必要とせずに読むことができるため、移動中や食後など合間の時間で読むことが可能である。それぞれの話題のTipsや後の研究進展状況なども分かるようになっている。更に、巻末には日本の研究も含んだ「自分の体を使う実験」の年表も記されており、本書で話題に取り上げられなかった研究者も分かるようになっている。

研究や人生に疲れたときに、勇気を与え奮い立たせてくれる1冊となるであろう。

(M.T.)

世界でもっとも美しい 10の科学実験

ロバート・P. クリース著
青木 薫訳

日経BP社 2006年発行
340ページ 2,100円
ISBN: 978-4-8222-8287-5

“実験”に美しいという言葉を使ってもいいものだろうか。絵画や音楽などと同様に科学実験を美しいと表現できるものなのだろうか。本書はこの哲学的ともいえる命題を解くために、Institute of Physics (英国物理学会) の Physics World の読者にアンケートをとり、その



中で得票数の多かった10個の実験について歴史順で取り上げている。話題の間には Interlude として、“実験は美しいか” という先の命題について著者の哲学的な論旨が毎回展開されており、哲学的な知識を多少必要とするが、科学実験に対する著者の愛情をうかがうことができる。

扱っている題材は、エラトステネスの地球の外周を求める実験やガリレオが行ったピサの斜塔での落下実験・斜面を物体が落ちていく慣性の実験、原題にもなっているニュートンのプリズムの実験やフーコーの振り子の実験など物理の基本的な実験から始まり、ミリカンの電気素量を求めた油滴実験、ラザフォードによる α 線の散乱実験など量子力学にまでわたる実験が取り上げられており、一つひとつが読みごたえのあるものとなっている。

本書の素晴らしいところは、科学者自ら記した実験構成図をもとに、式をできるだけ使わないで説明している点である。更に、有名な実験を取り上げて一般的な概要を紹介するだけではなく、時代背景や異なる主張をしているライバルたち、その実験に至るまでの思考的なプロセス、その後の展開なども調べ上げている点も面白く、今までの理解とは異なった視点から、著名な科学実験を知ることができる。

トリビアとして役立つことは間違いなく、ぜひ一読されることをお勧めする。

(M.T.)

〈勝負脳〉の鍛え方

林 成之著

講談社現代新書 2006年発行
168ページ 735円
ISBN: 978-4061498617



あなたは、自分は本番には弱いと思っ
ていないだろうか。プレゼンテーション
で緊張して失敗した経験はないだろうか。
はたまた最初から無理ですと諦めてしま
ったことはないだろうか。そんな人には、
ぜひ本書を一読されることをお勧めする。

著者は、脳外科、脳神経科学の専門医
であり、奇抜なアイデアにより人命だけ
ではなく、その後の患者の人生をも救って
きた第一人者であり、脳の仕組みを熟知
したプロフェッショナルである。

一定のレベルには達しているがその更
に上、オリンピックなどで卓越した者た
ちが競い合う中で勝てる能力、著者が
〈勝負脳〉といっている勝負に勝つための
能力は、勝負のそのときだけではなく、
日ごろからのロジックの鍛錬がものをい
う。一言で“勝つ”といっても、その勝ち
方にはいろいろあり、どのように勝つか
を具体的にイメージすることが大事であ
る。もちろん勝負には、勝っているケース、
負けているケースがあり、それぞれのケ
ースで、いかに勝ちを持続するか、勝ちに
転ずるかというメンタルなテクニックも
紹介している。これらを、著者の専門である、
脳科学という裏付けをもって、野球やゴ
ルフなど身近な例とともに、分かりやすく
説いたのが本書である。

勝負というのはスポーツの世界だけでは
なく、著者の脳外科手術やプレゼンテ
ーション、研究遂行、果ては子供の教育など、
ビジネスでもプライベートでも、様々に存
在する。本書を読まれることで勝ち組とな
り、あなたの人生が実り豊かなものとなる
ことを期待させる一冊である。

(M.T.)

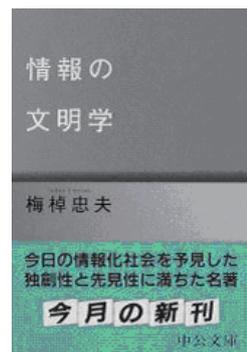
情報の文明学

梅棹忠夫著

中公文庫 1999年発行
316ページ 720円
ISBN: 978-4122033986

著者の「情報産業論」が発表されたの
は1963年(昭和38年)、戦後日本の工
業化が本格的に始まる時代である。こ
こで情報産業としてまず注目の対象とな
っているのは、当時、爆発的に普及しつ
つあるテレビをはじめとする放送分野で
ある。しかし、著者は「情報」という概念を
広く解釈し、「人間と人間の間で伝達され
るいっさいの記号の系列」ととらえる。テ
レビや放送はその一例でしかなく、新聞、
出版、旅行案内業、教育など、モノでは
ない「情報」を扱う産業・分野を考察の対
象とする。この観点から、第1の農業革
命、第2の工業革命に続くものとして、
第3の情報産業革命の時代の到来を予
測し考察している。アルビン・トフラーの
「第3の波」(1980年)の20年前に発
表された。

本書は情報産業論を含むいくつかの論
文集であり古典としても重要であるが、
今なお熟読するに値する。それは、一言
でいえば、「情報」を文明論的に考察・論
じているからである。たいていの人は、
農業革命から工業革命、そして情報産
業革命、と単一的に発展してきたと理解し
がちである。更に、前者よりも後者の方
が素晴らしい、と誤解する向きもある。
しかしながら、工業革命によって農業も



大きな変革を経験したのであり、また、
情報産業革命によって工業、更には農業
も影響を受けるのである。ここでは、情
報は「人間と人間のコミュニケーション」か
ら更に拡大され、それ自体で存在し様々
な分野に影響を及ぼしている。これらが、
著者の専門である民族学、人類学、比
較文明論から論じられているのである。

私事であるが、1970年代に「コンピ
ュートピア」という雑誌を講読していた。
楽観的な誌名に反して、コンピュータはど
のように人間そして社会にかかわるか、そ
の負の側面と課題は何か、などの記事が多
かった。このような記事の背景として常
に意識されていたのが著者の情報産業論
であった。久方ぶりに文庫となった本書
を読み返してみて、時間と空間の視野を
広げて考えることの重要性を改めて認識
した。日々、忙しい研究・開発に携わっ
ている情報産業の若手の方々に、車中
の一冊としてお勧めする次第である。

(K.Y.)

この本をお勧めします



若手の技術者と研究者へ